

■震災復興・国立科学博物館コラボミュージアム

恐竜アロサウルスがやってきた

平成24年9月11日(火)～12月9日(日) 当館ミニプラザ

アロサウルスは中生代の後期ジュラ紀に生息していた大型の肉食恐竜です。1964年に東京都上野の国立科学博物館で展示されたアロサウルスの骨格は、日本ではじめて展示された恐竜の全身骨格です。全身がほぼ実物からなるこの骨格は、アメリカ合衆国ユタ州のモリソン層（約1億5,000万年前）から発掘されました。

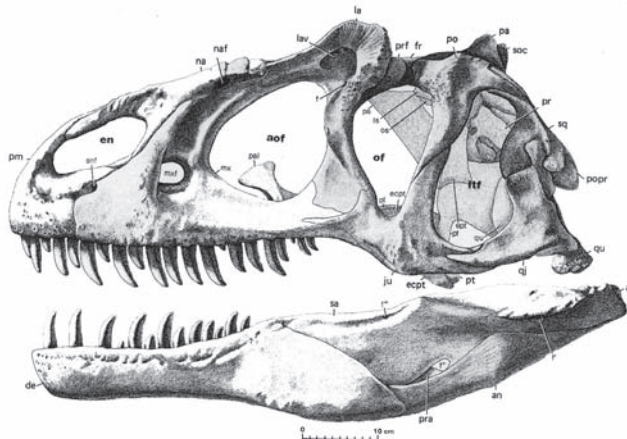
この秋、当館にこの恐竜が来ます。これは、国立科学博物館のコラボミュージアムという事業の一環で、東日本大震災で被災した東北地方を支援するため、平成24年度は岩手県内各地の博物館でこの恐竜が展示されます。6月下旬から久慈琥珀博物館ではじまり、8月中旬は陸前高田市米崎地区コミュニティーセンター、そして9月からは当館で展示が行われ、その後大船渡市立博物館でも展示

されます。関連した標本の展示は、遠野市立博物館、岩手県立水産科学館、一関市立芦東山記念館でも行われます。展示では、最新の岩手産恐竜化石についても紹介されます。

表紙にある最新の復元図では、アロサウルスに羽毛が生えています。2010年

にスペインで発見された前期白亜紀の獣脚類恐竜に鳥類の骨格に似たような形態があることから、羽毛の起源は従来考えられていたよりもかなり遡り、ジュラ紀のアロサウルスも羽毛をもっていた可能性が高くなってきたといわれています。

(学芸部長 大石雅之)



アロサウルスの頭骨 (Madsen, 1976).

■事業報告

第63回地質観察会「二戸市白鳥川の門ノ沢動物群～亜熱帯・熱帯の貝化石～」

平成24年7月8日(日) 二戸市

7月8日(日)に二戸市白鳥川流域で地質観察会が行われました。講師は二戸市文化財調査委員小守一男氏にお願いし、参加者は24名でした。

二戸市白鳥川流域の館から市役所付近までは、新第三紀前期～中期中新世(約1,600万年前頃)の地層が分布し、おびただしい数の貝類化石が産出します。市役所のある市の中心部で、これだけたくさんの化石が観察できる場所はなかなか他にありません。地層の名前は門ノ沢層(かどのさわそう)と末ノ松山層(すえのまつやまそう)です。門ノ沢層から出る貝類化石は「門ノ沢動物群」とよばれ、当時の気候は亜熱帯から熱帯だったことがわかっています。同じ時代の同じ

ような環境の貝類化石は、全国の他の場所でも「門ノ沢動物群」とよばれているので、二戸の化石はそれらの元になったものです。

10時すぎにシビックセンターを出発し、徒歩で穴牛橋まで移動して白鳥川で末ノ松山層のたくさんの貝類化石を観察

し、採集しました。昼はシビックセンターに戻って昼食をとり、小守氏による地質と化石の説明がありました。午後は自動車で館橋付近まで移動し、白鳥川へ下りて門ノ沢層の模式地(地層命名の元になった場所)で貝類化石の採集を行いました。

(学芸部長 大石雅之)



二戸市役所付近の白鳥川で採集したキムラホタテ